
追憶のツバサ Zodiac blessing

櫻 隆一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

追憶のツバサ Z o d i a c b l e s s i n g

【Nコード】

N 1 3 1 4 C

【作者名】

櫛 隆一

【あらすじ】

運が悪くてお人好しな主人公、皆川海人が、大天使ラファエルラヴァとして、三つの世界、神界「エントランス」人間界「ライフガルド」時の雫「エンドグラス」を駆け巡り、同胞ミカエルの悲願、神界統一、人間界の魔法統制を目指す魔術学園ファンタジーである。

第1話〜序章〜（前書き）

一話一話が短いですが、
気楽に読んでいただけると幸いです。

第1話／序章

「ああ・・・胸が痛い・・・」

一人の少年が森の中でたたずんでいた。

木漏れ日の射す中、この森を彷徨って幾時が過ぎただろうか。

少年は傷ついていた。

体も、常人には無い、背中に生えた煌く翼も、
所々に焼かれた跡や、斬られた跡がある。

しかし何よりも傷ついていたのは心だった。

「雪奈・・・・・・・・ミカエル・・・」

おもむろにそう呟いた。

足を引きずりながら、森の奥へと歩いて行った。

何故だか分からない。

吸い込まれるように、ある場所へと足が勝手に動くのだ。

「懐かしいな・・・・・・・・ここ・・・・・・・・」

そこには、子供が作ったにしては立派な秘密基地があった。

辺りには、ヒマワリや季節の花が、

この秘密基地を取り囲むように咲いていた。

しかし何故、彼のような背に翼の生えたような少年が、

このような場所を懐かしむのだろうか？

その答えは、2年前のある出来事にあった。

第2話〜運命の花境〜（前書き）

評価してくれると次話への参考になると思いますので、どうかよろしく願います。

次話も近いうちに更新します（・ω・）ノ

第2話　運命の花境

「ねえ海人？あの秘密基地憶えてる？」

彼女は葉月雪奈。

海人（翼の生えた少年）の幼馴染であり、世話焼きだ。

「あ・・・ああ、憶えてるよ。小学生の頃2人で作ったんだよな」

海人は本当に憶えているのか怪しい口調で言った。

確かに彼が言ったことは事実。記憶力は案外良いようだ。

「よく憶えてたね！？」

彼女はダメもとで言ってみたらしい。

彼も少し頭にきたらしく、少し睨みつけている。

「今あそこがどうなってるか気になるんだけど・・・」

「確かに俺も気になるな。好きだったからな・・・あそこ・・・」

「さっすが海人！！こういう時役に立つよね」

少々トゲのある言い方だが、彼は聞いていなかったらしい。

妙に秘密基地が気になってきたのだ。

彼の勘は人一倍強い。

まあ良いことに対しては全くと言っていい程働かないが・・・。

「どしたの？またいつもの男の勘？」

彼女は鋭かった。と言っても毎日会っているのだから、

大体の考えていることは分かるのだろう。

彼はこくりと頷くと、雪奈の手を引き、森の中へと足を踏み入れた。

彼はどれだけ”運が悪い”のだろうか。

森の中では今、1人の翼の生えた男が一人たたずんでいた。

そう・・・未来の彼のように・・・。

彼の運の悪さは筋金入りだ。

テストでは、苦手分野の配点が高かったり、

ビンゴ大会では当たったことなどない。

まあこれくらいは学校の中に何人かはいるだろう。

しかし彼は一味違う。

青信号で横断歩道を渡っている時、自動車と衝突。

全治2か月だった。それも夏休みが始まって間もない頃だった。

それに、バスに乗ればジャックされる。

もう銃やナイフを突き付けられたくらいでは、驚きもしないくらいだ。

それほど運の悪い彼の勘だ。良い事なんてあるはずもない。

「・・・・・・・・ん？・・・き、君は！？」

翼の生えた男は驚いた様子で、海人を見た。

雪奈は翼の生えた男を、物珍しそうに眺めた。

海人も、初めて見た神々しい翼に思わず見とれてしまった。

「あなたは・・・何者ですか？」

当然の反応だった。

いつもの冷静な判断ができないのも無理はない。
常人にはありえない、翼の生えた男を見たのだから。

だが、「何者ですか？」と聞いても、翼の生えた男以外の何物でもない。

それに、名乗ったところで謎が深まるばかりだ。

しかし、翼の生えた男は答えた。

「ミカエル……ミカエルだ。君は？」

問い返してきた。

だが、「君は？」と聞いても、平凡な高校生以外の何物でもない。
それに、名乗ったところでどうなるわけでもない。

しかし海人は答えた。

「海人……皆川海人です……」

非常に二人は似ている。

答え方も、雰囲気も。

思考も、しぐさも……。

傍から見ていると二人は、同じ処理をしているコンピュータのよう
だ。

「海人……か。人違いだったか？」

がっかりした様子でつぶやいた。

「いや……転生という可能性も……」

「あの……どうかしたんですか？」

雪奈が聞いた。

一人でブツブツ言っているのが、気になって仕方がなかったのだ。

「ああ・・・、彼が私の同志に似ていたものでな・・・」

翼の生えた男の同士であるなら、それに似ている海人も、その同志とやらとそっくりなのだろう。

一方海人は少し気になっていた。

この男はこのようなところで何をしているのか？

胸騒ぎがした。

いきなり不安になった。

どうして・・・？ なぜ・・・？

男は意を決したかのように切り出した。

「海人君・・・、私と一緒に時の雫エンドグラスに来てくれないか？」

「は・・・？」

彼は驚いた。

考え事をしている最中に、また謎が飛び込んできた。

時の雫エンドグラス？

来てくれ？

何故俺に？

わからない・・・。

また頭を抱え込んだ。

考えても分かるものでもないのに。

「駄目か・・・やはり・・・」

普通なら断るだろう。いや・断るべきだ。

訳の分からないところに連れて行かれるのを、

「分かりました」

の一言で済ませるのは、あまりにも2”単純”で”お人好し”な奴だけだろう。

そう。

海人は単純でお人好しなのだ。

そういった面では、これも”運が悪い”と言えるだろう。

「分かりました」

そう答えた。

やはり単純だ。

ここで「嫌だ」と一言言っておけば、”あのような事”に巻きこま

れずにすんだものを。

しかし悪い人には見えなかった。いや、

背の翼の神々しさがそう思わせた。

「え・・・、か・・・いと？」

耳を疑うのは言うまでもない。

何故行くの・・・と。

「大丈夫だよ、すぐ帰ってくるって。」

こんな考えも”単純”だろう。

「すぐ帰れる」

誰もそんなことは言っていない。

当のミカエルも、早く帰れるようにするつもりだった。

”つもり”だったのだ。

この男、ミカエルでさえ思いもよらなかった出来事が起こったのだ。

「心配すんなよ。必ず戻るから・・・な？雪奈」

そう言つて柔らかな光に包まれて、雪奈の前から姿を消した。
2年間もの間・・・。

雪奈は訳が分からなかった。

「はあ？わけわかんねえよ」みたいな感じた。

今まで横にいた幼馴染が謎の男と消えていった。
普通に考えれば”衝撃”だっただろう。

「海人・・・。」

一人ぼつんと、花に囲まれた神秘的な花境の中に立っていた。
何も考えられなかった。

ただ、彼の名を呼び続けるだけだった。

第2話〈運命の花境〉（後書き）

なにはともあれ、見てくださった方。

ありがとうございます。

これからも頑張っ て行きたいと思っていますので、
よろしく願いいたします（ ・ ・ ）
φ

第3話 リーブラ覚醒 (前書き)

今回からだんだんと核心に迫っていきます。

第3話　リーブラ覚醒

ズルッ・・・・・・・・ズルッ・・

海人は、足を引きずりながら、秘密基地の入り口まで辿り着き、腰を下した。

「はあ・・・・・・・・はあ・・、雪奈・・・・・・・・。帰ってきたよ・・・・・・・・俺・・」

もう体力の限界だった。意識が朦朧とする中、雪奈の名前を呟いた。再びこの場所に帰って来れたが、姿はまるでゲームの世界のキャラクターのように、現実離れしていた。

頭には透き通った輪、背には青白く輝く翼、服も日本には無いような物だった。

その中でも一番目を引くのは、彼の翼だった。

淡く光る翼は、多少傷ついてはいるが、その美しさは霞まない。

「どこだ・・・・・・・・雪奈・・・・・・・・」

そう言うとは彼は気絶して、入口に倒れこんだ。

朝日が彼の体を照らす。

差し込んだ光が神々しく光り、まるで一枚の絵画のようだった。

昇っていた太陽も沈もうとしていた頃、
秘密基地に一人の少女がやってきた。
彼女の名前は葉月雪奈。

海人の幼馴染であり、世話焼きであり、最も大切な人だ。

「だれ・・・？」

彼女は、入口に倒れこんでいる海人に対して言った。
遠くから見ていたせいかな、最初はだれか分からなかった。

「か・・・いと？海人・・・なの？」

近づいて初めて気がついた。
姿は変わり果てていたが、顔を見てはつきりとわかった。

彼女はあの日から毎日、何があってもこの時間に一人でここを訪れていた。

その努力がやっと実を結んだのだ。

「ひどい傷・・・どうしよう・・・」

あまりに傷がひどかったので、もう駄目かもしれないとさえ思えた。
でも触れてみると、海人の体温が手に伝わってくる。

「海人・・・・・・帰ってくるの・・・・・・遅いよ・・・」

涙ながらにそう言った。

雪奈の頬を流れた涙は、海人の手に、
ぽつり、ぽつりと落ちた。

雪奈は海人の手をぎゅっと握りしめると、彼の横に座り込んだ。

「うう……雪奈？」

雪奈に気づき、海人は目を覚ました。

「海人！？良かったあ……」

あまりの喜びに緊張がとけて、大粒の涙を流しながら、海人の胸に飛び込んだ。

「痛い……痛いつて……おい……」

海人も泣きながら雪奈を抱きしめた。

2年ぶりの再会。

あの頃は、2年間も離れ離れになるなど考えもしなかっただろう。互いに再会を喜び合った。

「早く帰りたいな……家に……」

「……うん、帰ろう……傷も治さないと」

「雪奈の治療はちよつと怖いな……」

笑いながらつかの間のあいだ話していた。

海人は今とても幸せだった。

こうやって話している時間が、ありふれた会話が、彼にとっては最良の幸せなのだ。

いつしか海人の頭の上にあった輪は完全に消えていた。そして突然、海人の腕が淡い青色に光りだした。

「な……なんだこれ、腕が光ってる……」

「なにこれ・・・」

彼の手の甲に不思議な模様が刻まれていた。

「なんだ・・・？これ・・・！！？あれ・・・傷が・・・治ってる！？」

いつしか彼の体を覆っていた痛々しい傷は、きれいさっぱり消えていた。

心地よい風が吹いた。

全身が青白く光り、彼の中に温かいものが流れた。
おだやか・・・それでいて、力強いものを感じた。

彼の体に宿った力・・・” Z o d i a c ”

横道十二宮と呼ばれる。

主に占い等に用いられるものである。

彼の手に刻まれた模様、Ωに┃を足したような模様。

「天秤宮」

リーブラとも呼ばれ、携帯の絵文字などにも使われている。

何故このようなものが、彼の手に刻まれたのかは分からないが、
世界を動かす、大きな力ギを握ったのだった。

「この模様どこかで・・・あっ！？そうだ！」

彼女は慌ただしく秘密基地に駆け込んだ。
海人も慌てて後を追った。

「ほら・・・これ・・・。私たちが居た頃にはこんなの無かったけど」
「同じだな。手の模様と・・・」

秘密基地の中に大きな幕が張られていて、リーブラの模様が描かれていた。

「あとこれが・・・」

彼女が差し出したのは手紙だった。

差出人はミカエルで、”海人以外は解読不可”と書かれている。

「ミカエルから・・・」

海人は手紙を開けると、中には真っ白の紙が1枚入っていた。

「真っ白？」

雪奈は首を傾げながら言った。

リード・インテリジェンス
「解読の叡智だな」

「リード・イン・タンス？何それ??？」

彼女は特有の天然のボケをかました。

彼はくすくす笑いながら、

リード・インテリジェンス
「解読の叡智だよ。まあ高度な魔法封印みたいなものかな」

「へえ・・・」

「へえって・・・学校で習っただろう？」

「私、実技派だから」

彼女はふくれっ面をして、嫌味そうに言った。

「相変わらずだなあ・・・」

「もう・・・いいから早く見なよ」

彼は紙切れに手を当てると、

「我は、大天使ラファエルラヴァの名を継承する者、皆川海人の名において、解読の叡智を施行する」

そう言うのと紙切れは赤く燃え、字が浮かび上がってきた。

そこには、海人への謝罪と、秘密の内容が簡潔に綴られていた。

海人へ

君には本当にすまなかったと思っている。

悔やんでも悔やみきれない。

もし君が私を怨んでいるのなら、

ここから先の内容は読まずに処分してくれ。

この内容は、君と君の信頼できるものにしか言わないでくれ。

あの事件はこの新界、人間界、時の雫全ての問題だ。

私はもうどうする事も出来ない。

だが、Zodiacの宿る君になら、なすことができるかもしれないな

い。

お願いだ。

これらの世界を救えるのは君だけなんだ。

どうか再び力を貸してほしい。

手紙の内容はこれで終わった。

「ミカエル……分かったよ。神界の友を救ってみせるから！
！これは俺にしかできないことなんだ。必ず……必ず成し遂げる
から！！」

こうして、彼のすべてを巻き込んだ神々の戦いが始まるうとしてい
た。

恐怖の神界戦争が……再び……。

第3話「リーブラ覚醒」(後書き)

もつと2人をラブラブにさせたかったんですが、それは次回をお楽しみに(#^・^#)

第4話　私立戒山魔法聖徒学園（前書き）

今回はいつもより少し長めにしてみました。

生まれ持って素質のある者だけが、入学をゆるされる。

雪奈は学園の高等部3年生。小学部から、大学部までエレベーターだ。

ギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリ！！！！

再び目覚まし時計が鳴り始めた。

いつもの場合はここでもまだ、ベッドから出ることはないのだが、今回は違った。

「お〜い！起きろよ、顔に落書きするぞ！」

彼、皆川海人は雪奈とおなじ家に住んでいる。

彼の背には相変わらず翼が生えており、少し違和感がある。

「うゝゝゝゝん。・・・・・ZZZ」

「おい！！起きろっての！」

海人は油性マジックを構えながら言った。

「んんん、わかたわかた・・・」

彼女はようやく起き上った。いつもより20分ほど早い。

眠そうに欠伸をすると、夏服に着替えだした。

海人は顔を赤くしながら、手に持っていたマジックをしまうと、さっそうと部屋を後にした。

戒山の制服は、セーラー服ではない。

何か南国を思わせる雰囲気だ。

上は薄地の黒い長袖でその上に、腰近くで丸結びするタイプのもの
で、

下のスカートは、チャイナドレスを短くしたようなものだ。
スカートには校章がプリントされている。

着替え終わると、海人が作った朝食を食べ始めた。

海人も食べながらふと漏らした。

「やっぱ昔と変わんないな。寝起きの悪いとこなんかパワーアップ
してるし」

「えへへへへへ・・」

脳天気になんか笑ってみせた。

かわいい笑顔を見せられた海人は再び赤くなった。

「俺も学校行ったほうがいいかな？」

「絶対来たほうがいいと思うよ〜〜〜〜？」

「ま、まあみんなに心配かけたわけだしな・・」

海人は苦笑いをする、食器を片付け始めた。

海人は元々魔力が強く、学園でもトップクラスだった。

それに、2年間大天使ラファエルラヴァとして生きていたため、計
り知れない力を備えていた。

一方雪奈はというと、類稀なる努力家で、毎日基礎魔法から今日習
った魔法まですべて復習。

授業も毎日の予習のおかげであまり失敗をすることは無い。

お互いに、クラスでは上位に位置している。

雪奈のクラスはメイジクラスといって、主に三界に存在する8要素
を用いた魔法を使うクラスだ。

普通のクラスは稀な順に、サーヴァント、ウィッチ、メイジ、ウィザードの4種類があり、

メイジは特に賢いものが多かった。

その中で上位なのだから凄いと言えよう。

「ああ！！！遅刻しちゃう！！」

話がはずみ、時が経つのを忘れていた。

海人は準備を終えると、雪奈のカバンに弁当を入れた。

「弁当入れておいたからな。準備は出来た？」

「うん、一応全部」

「じゃあしつかりつかまつてろよ！！」

そう言うとき雪奈を抱き上げ、目一杯翼を広げて空に舞った。

「ふう・・・やっぱりこの風は気持ちいいな」

「わあ！！すごーい！！空飛んでる！！」

横で感傷に浸っている海人を尻目に、大はしゃぎした。

なんやかんやで、はしゃいでる間に学校へ着いた。

着くと同時に朝のチャイムが学校中を響き渡った。

「ああ~~~~！！急がなきゃ！！じゃあまたあとでねっ」

雪奈は全速力で教室へ向かった。

しかし、メイジクラスは学園内の奥側にあるため、確実に遅刻だろう。

そんなことを考えながら、久しぶりに帰ってきたこの学園を見て小

さいころを思い出した。

広大で荘厳な造りのこの学園は、彼や生徒たちにとっては家のようなものだ。

生徒のすべてが家族同然で、知らないやつはいない。

同じ境遇で育ったため、共感するものがあるらしい。

「友達100人できるかな？」とよく言うが、家族が200人近くいる奴は、この学園の生徒くらいだろう。

その中でも特に人気で、人当たりの良かった海人が、突然いなくなった時は、大騒動だった。

「まず職員室に行くか・・・」

職員室に行く途中にも、小学部や中学部などの教室がある。

なるべく見つからないようにこっそりに行く。

幸い、朝の時間なので、全員教室の中だった。

今見つければ大騒ぎになるかもしれないので、気を使っていた。

「職員室・・・か・・・」

着くと、海人は戸をノックし、

「3 - E N 皆川海人 入ります！」

と言って、職員室の中に入って行った。

「！！海人！海人か！？」

「おお海人。帰ってきたのか！！」

「心配していたんだぞ。まったく。」

「雪奈さんから聞いたわ。大変だったでしょう？」

「お帰り海人くん。」

先生が各々海人に声をかけた。海人が丁寧な一人一人挨拶をしていると、ようやくある先生が海人の異変に気づいた。

「海人？お前の背中にあるの何だ？」

2 - S Rの神明が、海人に聞いた。

他の先生も気づき、海人の背中を覗きこんだ。

「これは・・・翼です。大天使ラファエル様から受け継いだ・・・」

少しうつむき加減で言った。

彼はそのまま話を続けた。

「話は長くなりますが、俺がいなくなった2年前。初めて会ったミカエルという大天使に時の雪に来るように言われました。」

「その話は雪奈から聞いたわ。その後どうなったかは聞いていないけど」

「時の雫と言え、三界のうちのひとつだな」

1 - M Gの柊と、2 - W Zの神谷が答えた。

「はいそうです。その時はまだ三界のことは知りませんでした。・

「何故、ミカエルに連れて行かれたのだ？」

「やはり魔力でしょうか？彼は我々を凌ぐほどの力の持ち主ですから。」

「それが
・
・
・
・
・
・
」

今まであったことを包み隠さず答えた。

「連れて行かれたのは、俺をラファエルの後継者とするためだけではなかったんです。」

ここに帰ってきたときに知りました。それは俺が”Zodiac”の所有者だったからなんです。」

「”Zodiac”だと！？まさか君が！」

「伝説に語り継がれるZodiacですか・・・」

皆が驚きを隠せないのも無理はなかった。

世界を動かす力”Zodiac”

今まさに、現代に再誕したのだ。

「問題はここからです。俺は継承の儀を受け、神界に君臨しました。エントランス

そのあとここに帰ってくるはずだったんですが・・・。

俺がいた神界は二分されていました。アライヴ万物の法を司る天命天使と万物の死を司る刻死天使の2つに。デッド

俺は天命天使側でした。

2派は対立を続け、帰るに帰れなくなりました。

そして神界戦争ラグナロクが再び始まったんです。こうしているうちに、世界の均衡は崩れ、やがてこちら側にも影響が出ると・・・

「

今神界で起こっていることを伝えた。

他にも、時の雫の荒廃、人間界に降りかかる火の粉について、知りえることをすべて学園に伝えた。

今の政府に伝えたら、世界中が混乱し最悪の事態を避けるためにも、一番信頼できる学園に伝えたのだ。

「事態は思ったより深刻なようだな。」

「我々にできることをやりましょう。きっとこれが私たち魔術師の使命なんでしょう」

「そうだな。それに海人がいるんだ。生徒もわかつてくれる」

「できれば、生徒のみんなは巻き込みたくなかったんだけど・・・。俺一人にも限界があつたんです。皆さんの力、貸していただけますよね？」

「「「「「「「「「「「「おう！！」「」「」「」「」

そして学園中に放送された。

生徒たちは皆、海人を信じ、協力すると言った。もちろん強要はしていない。

全ては彼らが自分自身で考え、決めたことだった。

「海人君、久しぶり！！やつつと帰ってきたんだね！！」

「オウ海人！！相変わらずだなお前も。大変なことに巻き込まれて俺とおまえの中だ、遠慮せずに何でも言えよ！！」

「俺らは家族だもんな！！」

「菜月・・・彪牙・・・雅人・・・みんな・・・ただいま！！！！」

堪えていた涙が一気に溢れ出した。

皆が海人の帰りに喚起した。

天使になって帰ってきた海人に驚きもせず、ただただ再会を喜びあった。

「さあみんな！今まで以上に授業に力を入れるぞ！！！！」

3-WIの久留瀬が気合いのこもった掛け声を出した。
全ての生徒がまた一つ一体化した。

昼休み。

全員が食堂に集まり、わいわいと食事を始めた。

海人の周りには、いつものメンバーが集まっていた。

3 - M G、はづき葉月 雪奈。

4 - W Z、くさかみ草神 凜。

t 2 - W I、きりや霧谷 唯。

3 - S R、てんとつ天道 彪牙。

3 - W I、きりゆう桐生 雅人。

2 - M G、こがらし凧 美羽。

2 - S R、くろなぎ黒薙 流華。

みなとても小さな頃から一緒にいて、本当の兄弟のような存在だ。しかし、最年少の唯と流華は、海人がどちらの物かでもくめていない。

それを雪奈がハラハラしながら見ている。

彪牙、雅人は女性陣におされ気味な所があり、肩身が狭い時もある。美羽と凜は清楚な感じで、周りとは少しオーラが違う。

実に面白い集まりだ。

「こうやって俺ら全員がそろうのは2年ぶりか・・・」

「なんかいつも当たり前だったのに、離れてみると大切さがわかるな。」

「またみんなに会えてうれしいよ。」

皆が当たり前の幸せを噛みしめていると、

「ああ~~~~!!海人さまこんなところに!!」

「えへへ・・・お帰り海人様・・・」

「私たちも寂しかったですう~~~~」

「私たちがまた活動する時がやってきたんですね!!」

「うつ・・・君たちは・・・」

かなり濃いキャラの4人組がやってきた。

通称「海人様特別親衛隊ウォーロック」。

隊員は、

t 2 - M G、みくら三倉 亜美

4 - W Z、ほうりゅう崩立 静

1 - W I、さかがみ坂上いつき

s 6 - N C、つきしま築嶋 蓮

どこからともなく現れる海人のおかげで、勝手に海人のグッズまで作っている程の力の入れようだ。

2年間会えなかった分活動意欲が増している様子だった。

「またお前らか。よくやるよな、俺は追っかけてくんないの?」

「魅力的じゃないからや〜ですう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんかショック・・・」

「ま、まあ気を落とすなよ・・・」

彪牙は男前なのだが、強くてかつこいい海人の前では霞んでいる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

長い沈黙があつたかと思うと、ウォーロックと例の2人、唯と流華が火花を散らしている。

「唯・・・ひとまず停戦よ」

「うん。そうするしかないみたいだね。」

「私たちとやるっていうの？いいわ。因縁の決着をつけましょう」

そう言うと6人は外へ出て行つた。

終始お互い睨み合っている。ただし特別なことではない。毎回起っている。

他の皆も、あまり気にしていない。

因縁の決着は、100回以上起こっているが、決着が着くことはない。

お互い倒れるまでやろうとするので、いつも海人が止めに入っていた。

「さてと。弁当でも食べるか、みんな」

いつも雅人がこのセリフを言う。
体に染みついた流れのようだ。

「わあ。雪奈のお弁当美味しそう！」

「そうでしょ。海人が作ってくれたんだ〜。」

「うらやまし〜な〜。万能彼氏は。なんでもできるじゃない。」

「そ、そんなじゃないって・・・でも海人、虫が苦手だよ？」

「弱点もなんかかわいい・・・」

と、女子特有の会話が始まった。

「なあ海人。神界ってどんな感じだった？」

「大自然だったよ。街みたいなのは1つしかないし。」

「へえ……。行ってみたいな。」

「そうだな。みんなでいけたらいいな。そのためには、神界を救うんだ！」

「そう……。その意気だよ……。海人……。三界を救えるのは君だけだ・
」

どこからか声が聞こえてきた。

聞き覚えのある声だ。幼い男の子の……。

「今の……。」

「ん？どうしたんだ？」

「いや……。別に」

空耳かと思い、それ以上気にしなかった。

お昼も終わり、皆が各々の教室に帰り始めたころ、海人は先生に呼び出された。

「何でしょうか？」

3・MGの葛城かつらぎが話を持ち出した。

「海人君。3・ENは君しかいないみたいだし、君に教えることはもうないと思う」

「それで、何ですか？」

海人は一瞬ドキツとした。卒業させられるのか・・・と。
しかし予想はずれた。

「君に全組の臨時教師をやってほしい」

「え・・・俺がですか？」

「幸い君は才能も知識も完璧だ。それにエンチャントロッククラスは全クラスとの縁があるからな」

彼は考えたが、皆が自分のために力を貸してくれているのだから、自分でみんなを引っ張っていこうという気が芽生えた。

「わかりました。やってみます。」

「ありがとう。我々が教えるのにも限界があつてね。助かったよ。」

こうして、彼の先生としての新たな学園生活が始まった。

翌日。

「ねえねえ聞いた？海人君が臨時教師になったらしいよ？」

「ええ！！ほんとに！？すごいね海人君！」

「楽しみだな授業ww」

その頃彼は、職員室の自分専用の机に座り、授業の計画をしていた。

「メイジがこうで・・・サーヴァントが・・・んで、ウィッチかこうだから・・・よし！！できたぞ・・・」

全ては来たる日までへの備えだ。

自分の授業しだいで運命は変わるかもしれない。

彼は自信に満ち溢れた様子で、3・M Gの教室へと向かった。

「今からメイジの基礎から応用までをやるよー。」

「よーし。気合い入れていくぞー」

みんな海人に見られているせいか、やる気が半端ではない。

「よし。じゃあ初級マナから。水、風、地、どれか得意なものを選んで。」

んで選び終わったらそれぞれ並んで。」

普通はすべてのマナを習うのだが、絞ったほうが効率がいいと考えたらしい。

無理な部分や、苦手な部分は互いに補い合えばいいのだから。

その方法は他の教師からも評価された。

得意なものなのでみんなも、海人の授業で大きくかわっていった。

中位マナと上位マナも同じく火、雷、光子、霧、無に分かれそれぞれ一対一形式で教えていった。

もはや彼に抜きはない。

苦手部分も彼の矯正魔法である程度は良くなっていった。

「さすが海人！！この授業受けただけでだいぶ変わったよ！」

「わかりやすいし、何より一対一だからモチベーション上がったわ
wwホントに楽しかった（悦）」

もうこれは彼の人柄でしか成しえなかった。

正直教師の皆々方も頭が上がらなかった。

「じゃあ今日はこれで終わりっとな。」

ひと段落終わると、彼はカフェテリアへと足を運んだ。

この時間、いつもの八人組が集結する。

相変わらず唯と流華は海人の隣を取り合っている。

「はあ。さつきはかなり緊張したよ……」

「そうかな？余裕そうだったけど？」

「心の中では心臓がゴマのように縮んでたよ。まあでも頑張ろうって考えると自然とあぁなってたんだ」

ミルクと砂糖が少し入ったコーヒを飲みながら授業の反省会をした。

まあ波の教師よりはよっぽどいい授業だっただろう。

わいわい話していると、緊急放送が流れた。

「緊急警報です。現在、学園上空にキメラタイプのヒュドラを確認
！！一五歳以下の生徒は、安全な場所に避難し、上級生徒、並びに
教師の皆さんは戦闘準備を行ってください！！

繰り返します！！一五歳以下の生徒は、安全な場所に避難し、上級
生徒、教師の皆さんは準備をしてください！！」

「キメラタイプのヒュドラ！？もしかして・・・」

海人は丸腰でヒュドラのもとへ向かった。

グラウンドにはまだ生徒がいた。

「早く逃げろっ！！ここは俺に任せて！！」

「か、海人さまぁ・・・怖いです・・・」

いつきのからだはぶるぶる震えていて、足がすくんで動けなかった。

「キシヤアアアアアアアア！！！！」

九つの首をもった蛇竜がグラウンドに出現した。

彼はいつきを守りながら戦おうとした。

「か、海人さまぁ。私のことはいいですから・・・」

「馬鹿言っな！！見捨てられるわけないだろう！家族なんだから！」

体長100mはある蛇竜を一人で相手できるとは到底思えない。

それも1人の少女を守りながら。

「そうだ、空間結晶魔法だ・・・」

何かを思いついたかのようにキャスティング詠唱を始めた。

「彷徨いたる双頭の御霊よ。あらゆる災厄から、幼き魂を守れ！！」

唱え終わると、いつきの周りに強固なバリアが張られた。

張られたことを確認すると、ヒュドラの方へと歩き出した。

「やはり……このヒュドラ……刻死天使マターが……」

「海人！！！！剣を忘れてるぞ！！！」

「いや・剣で斬ったところでまた再生するだけだ。そうなる」と

キヤステイング
またしても海人は詠唱を始めた。

「天を舞う炎よ。罪深き咎人に魂の救済を！！」

「断罪の煌葬火！！！」

海人の周りから眩しいほどに輝く聖火が、ヒュドラを襲った。

「グギヤアアアアアアアアアアアアアン」

ヒュドラは九つの声を上げながら、灰になった。

「くっ……人間界にまで手を出すのか……。あいつは。もう俺から大事なものは奪わせない……」

海人は拳を力強く握り締めると、いつきを抱き上げ、中に戻って行った。

海人を見守もっていた生徒たちは、海人の活躍に再び歓喜した。

第4話〈私立戒山魔法聖徒学園〉（後書き）

クラスについての簡単な紹介です。

メイジ… 8要素を利用した魔法を使用するクラス。（MG）

ウィッチ… 暗黒魔法を用いるクラス。（WI）

ウィザード… 魔法具、魔法薬を精製する魔法を使用。（WZ）

サーヴァント… 異界に住んでいる生物を召喚するクラス。（SR）

アルケミスト… 錬金や、創造魔法を得意とする上位クラス。（AR）

ネクロマンサー… 時間魔法を得意とする上位クラス。死霊使いと呼ばれていたが、昔に途絶えた。（NC）

エンチャントロッキ… 禁呪魔法、魔法定式、魔法剣を操る上位クラス。（EN）

第5話〜異端王〜（前書き）

五話は海人が、二年間^{エントランス}神界で戦っていたときの話です。

第5話　異端王

神界。神々の住まう場所。

そこには、2つの国と1本の樹があった。

アライフ
天命天使の国、エルベレシア。

デッド
刻死天使の国、クログレイド。

その間に高くそびえ立つ世界樹、ソウルブレス。

神といっても、人間界を見守っているわけでもなければ、支配しているわけでもない。

それは人間の勝手な妄想にすぎない。

それぞれ自分たちのために生きているだけだ。

ただ、彼らの影響は強く、人間界を間接的な支配という形で、支配してしまっている。

天命天使と刻死天使は、昔から対になる存在で均衡を保ってきた。

どちらかが滅びれば、必然的にもう片方も滅びる。

そのような関係で今まで平和を保ってきた。

しかし、ある男が現れてから、その均衡は崩れた。

刻死天使王アルデライ＝ロディアス。

先王の後を継ぎ即位した、騒乱の中心人物。

彼は、神界の均衡を破り、天命天使を根絶やしにしようと目論む。ただ反論をするものは大勢いた。

相手が滅びれば、こちらも滅びるのだから。

その者たちが反発して、クログレイドで紛争が起こった。

だが、反乱軍は精鋭の天使には齒が立たず、多くの人が亡くなり、生き延びた者はエルベレシアへと亡命した。

天命天使側は、亡命を受け入れ、逃げ延びた者を守ることを約束した。

エルベレシアは異端の王を討伐するため、4大天使を中心とした軍を結成。

勿論一般市民および、兵士の殺害は禁止とされた。

王と王に賛同する幹部のみの討伐だ。

そして作戦実行の日がやってきた。

天命天使側は、相手を殺さず捕虜という名目でとらえ、強制で戦わざるをえなかった者を、自国の一般人としてかくまった。

戦力の途絶えた刻死天使側は、呆気なく敗れた。

王は時の^{エンドクラス}雫で永遠の牢獄行きになった。

これで両国間は争いがなく、平穏の日々が続くかと思われていた。

だが、事件は起こった。

4大天使の1人、ラファエルが何者かにより殺害された。考えは甘かった。

刻死天使側は、アルデライがどうにかなることは最初から予測していた。

そのため、アルデライは2重の作戦を練っていた。

自分の娘マターと、精鋭達の一部を安全な場所にかくまい、負ければマター達が次の作戦に移る。

マターはラファエルを暗殺し、新たにクログレイドを立ち上げた。

同胞を失ったミカエルは、人間界に行き救世主を探した。
それが海人だった。

2年間もの間、彼が人間界に帰って来れなかった直接的な理由が、
マターが新たに起こした戦争だった。

海人は、ラファエルの後継天使としてエルベレシアに降臨した。

彼の力は並の天使より優れていた。

その実力は誰もが認め、期待の星だった。

しかしなぜ帰られなかったのか？

別に帰らないわけではなかった。

そもそもこの国に来たのは時の雫にいる易師オーラルイズに、

「近いうちに神界で、争いが始まる。血を血で洗う汚れた復讐戦争
が……」

と言われたからだ。

復讐……マターの何か？

ミカエルはそう思い、彼に人間界に帰ることを勧めた。

帰ろうと思えば、いつでも帰ることは出来た。

神界に行くのは彼自身が決めたことだ。

お人好しな彼が……。

海人はミカエルの提案を拒否した。

神界の民を守ると。平和にして見せると。ラファエルの仇を討つと。

……そうミカエルに誓った。

縁もゆかりもない神界のために危険を冒してまで戦う……。

そんな海人にエルベレシアの民は希望を見出した。

「彼ならきつとこの世界を救ってくれる」と。
少しずつクログレイドの民も心を動かした。
神界全体が、彼の奮闘に心を開き、いつしか彼のもとには多くの民が集まった。

ただ、マターの力は逸脱していた。
何人もの精鋭が目の前で倒れて行った。

2年間友に闘ってきた者が次々とマターに殺された。
呆気なかった……。

海人は今までにない怒りに駆られた。
神獣イフリースの様に、心も拳も大地を揺るがすほどの怒りに震えた。

1対1で向かい合い、構えた。お互い一瞬の隙もなかった。
互いが剣で打ち合う。一閃の剣戟も通らない。
互角だった。

剣を振る手が、もう一撃も繰り出せないほどに疲れていた。
だが勢いは増し、一步も引かない。

海人はラファエルと友の仇を討つために。
負けたくないと思う気持ちが強まるほど、心が熱くなった。
そして極限に達したとき、互いの剣が、互いの体を貫いた。
海人は最後に残った力を振り絞り、剣を引き抜いた。
そして自身も地面に倒れた。

「ははっ……。笑っちゃうよな……。こんなところで終わるなんて……。」「

そう言うと急に雪奈やみんなの顔が頭を駆け巡った。
涙が溢れた。もうみんなに会えないのかと。
意識の消えかける中、ふと雪奈と交わした約束を思い出した。

「死ねないよ・・・、こんな・・・ところ・・・で・・・そうだ。
約束したんだ・・・必ず・・・帰るっ・・・て・・・」

帰りたい。それだけしか考えられなかった。

海人は倒れているマターを見向きもせず、転移魔法を使い人間界へ帰った。

マターは死んだと思っていた。

だがあのときまだマターは生きていた。

彼女を貫いた剣は奇跡的に心臓を外れていた。

マレアリーフ「タイトロディアス・・・・・・・・・・」。

容姿とは裏腹に、強い心と、力を持った少女だった。

だが全てはアルデライの策略だった。

自分が負け何かがあったとき、娘は自分のために戦ってくれるだろうと。

最初から利用されていた。

マターもまた、被害者だった。

しかし彼女はわかっていた。

父の愛情は、この策略のためだけに注いだ偽りの愛情だと・・・。

知りながらも彼女は戦った。

父のためでなく、父に殺された民のために・・・、そして・・・。

マターは、父の残した幹部たちを集め、1人1人殺していった。
けじめをつけるために・・・。

だが1人、例外の者がいた。

ラズィールⅡカルラⅡロディアス。

彼女の姉であり、マターの一番心の許すことのできる人物だった。
ラズィは彼女を強く抱きしめ、悲しみを分かち合った。

．．．．．かのように思えた。

アルデライ．．．．．つくづく恐ろしい男だった。
最終作戦．．．．．。

それは、マターが敗れた時の保険だった。

ラズィを新王とし、第三のクログレイドを作る。

邪魔になったマターは牢獄に幽閉された。

娘ですら自分の駒にする男．．．．．。

邪道。非道。卑劣。まさに異端王だった．．．．．。

海人は人間界へ帰ってきた。

マターの境遇も、本当の”血を血で洗う戦争”の意味も知らずに．．．．．。

第5話〈異端王〉（後書き）

今回は主な登場人物「1」の紹介です。

皆川海人^{みながわ}…魔法学園の3年生。ラファエルの後を継ぐ。

葉月雪菜^{はづき}…海人の幼馴染。おなじ家で暮らしている。愛称は”ゆき
つち”。

ミカエル…4大天使の一人。現在は行方不明。

草神^{くさかみ} 凜…海人達より1つ上のお姉さん。愛称は”あねさん”。

霧谷^{きりや} 唯…中学部の2年。海人が好きなおませさん。

天道彪牙^{てんとう}…海人の親友。イケメンだが、海人以下。

桐生雅人^{きりゆづ}…海人の親友。物知りで調子者。

凧^{こがらし} 美羽…高校部2年。華道や茶道が好き。

黒雞流華^{くろね}…美羽と同年。唯と海人を取り合っている。

今回は人物紹介「2」です。

これからも見ていってくださいね、（＾o＾）

第6話「戦慄」・魔狂領域「前編」(前書き)

前の話とだいぶ期間が離れてしまいました。

これからはまた定期的に更新していこうと思います^^

今回は前編と後編に分かれます。

後編も来月初旬には更新します^^;

第6話「戦慄」・魔狂領域「前編」

私立戒山魔法聖徒学園。

今日も、200人あまりの生徒たちが、授業を受けにやってきた。皆、学園側から与えられた家から各々登校する。

ところで、この学園の主旨は一体何なのか？

生徒たちに多額の生活費を渡してまでしたい事とは何だ？

普通の学問は習わず、社会に出るための勉強もせず、魔法を習う学園。

もともと何のために作られたのか？

学園の創始者は今、学園にはいない。

どこかでどこかに暮らしているのか…。

それとも、次元の挟間を彷徨っているのか？

目的を失った学園……。その学園に残された、古の力であり新しくもある力。魔法…。

そんな学園に彼らは通っていった。

「よっ！！！！海人くっ！われらがヒーロー！！！！」

「朝から元気だな彪牙……。俺なんか寝不足で……。よう…。
海人……。ふわぁ…。」

2人は両極端なテンションで海人に挨拶した。

彪牙はニコニコして元気そうだが、雅人はぼくくくとしていて。魔法実習のレポートを徹夜でしていたらしい。

彪牙はというと、もちろんレポートなどやっていない。

この後担任に、呼び出しを食らうはめになる。

「ああ。おはよう2人とも。・・・ていうかヒーローって呼ぶのやめてくれよ。恥ずかしいだろ」

「いいじゃない。褒めてもらってるんだから」

「そうだよ。人がせつかく褒めてんだからさ」

「お前に褒められてもなw」

昨日のヒュドラ退治のことで、学園のみんなが海人を「ヒーロー」と呼んでいた。

本人は嫌がっているようだが、周りはおかまいなしだ。

拌み始める強者までいる。もちろんふざけてやっているだけだが・・・。

といってもヒュドラなんて大した魔物ではない。

彼らはあの日初めて魔物というものを見たのだ。

ある程度魔力があればだれでも倒すことのできるようなその程度の魔物なのだ。

しかし経験がなければ、どんなに簡単なことでも完ぺきにこなすことは難しい。

恐怖というものもあるだろう。

慣れれば問題はない。

知らないものほど怖いものはない。

そついうことだ。

だから彼は嫌がっていた。

あの程度で大騒ぎされると逆に困るというわけだ。

と言ってもあの時ヒュドラを倒すことのできるものは彼以外になか

っただろう。

1 限目が始まる。

全校生徒が集まって、先日のことについて話があるらしい。

海人も説明側で参加した。

神界のことには触れなかったが、魔物についての説明を小一時間した。

これから起こるであろう戦いについても……。

「もはや時間はないんだ、俺達には。近いうちにあの様な魔物がここに来る。俺たちがどうにかしないといけない。それだけはわかっておいてほしい。」

そう話を締めると、ちょうど1限目を終えるチャイムが鳴った。今日から特別授業ということで全校生徒で、海人を含む講師から授業受けることになった。

「あくまで相手は魔物だ。気を抜くと命を失うことを忘れないでほしい。」

海人は重い口調で言った。

「対峙したらすかさず杖を抜け。」

そう何度も繰り返した。

いくら海人でも、全校生徒200人すべてを守り抜くことは難しい。自分たちでどうにかしなければ、多くのものが命を失うはめになる。海人は何としても、”こちら側”に被害が及ぶことなく、目的を達成しなければならなかった。

全ては自分の大切な仲間、そして3つの世界を守るため。

「次に魔物が来る時は1体では来ないと思う。大群で、確実に仕留めるためにな。」

狙われているのは俺だけではない・・・。

自分が学園から離れたところで、見せしめに学園を破壊する可能性は十分にある。

そうなれば、抵抗することすら不可能かもしれない。

そう考えながら、さっきの言葉を口走った。

不安を抱えつつ、その不安を振り払うかのように、生徒たちは魔法を練習した。

誰もが、ここにいるみんな・・・家族を救おうと・・・。

学園の先生も、いざというときのため、準備をしていた。

魔導紋章兵器”デジエネレーター”

魔力の波動で一種の空間を生み出し、閉じ込め、内側から大爆発を起こし破壊するものだ。

衝撃は一切ない。

あるのは内側だけだ。

ただし消費する魔力は並大抵のものではない。

先祖代々、学園に在籍した学園長が月日を重ねて魔力を送り込んできた。

今まで一度も使われていないため、これまでの魔力が衰えることなく、兵器の中に蓄積されている。

ただ、これだけの魔力をもつてしても、いくら使えるかも分からない。

もしかしたら使えないかもしれない・・・。

だがもしもの時はこれに賭けるしかないのだから。

十数人いる先生らが、休まず魔力を送り込んだ。

「よし！！次は実戦魔法だ。」

「おっ！とうとう来たか！」

彪牙は待っていたかのようにいきなりはしゃぎだした。

「まだそんなに元気があるのか・・・。さすがお前だよ。好きなことだけには真剣な所は勲章ものだなw」

海人はそう言うと、くすくすと笑いだした。

それにつられ周りにいた者も次々と笑い始めた。

「まあ俺にはそれぐらいしかとりえがないからな」

「呑気なことを・・・」

「んだよ。早く教えるよ。待ちくたびれたぜ俺」

「ふう・・・わかったよ・・・。じゃあみんな、教えるからしっかり繰り返せよ」

海人はそう言うのと杖代わりである剣・・「命晶剣ラヴァーストーム」を自らの前に突き出し、こう唱え始めた。

「我が願うは理の炎・・。」

我が願うは猛る炎・・。

我が願うは冷厳なる炎・・。

今、立ちはだかる全ての者からわが友を救え！」

そう唱えると海人の周りから、青い炎が出現した。うねる様に海人の周りをまわる。

「この炎は普通とは性質が違った。・・まあ簡単にいえば、殴ったりもできるし壁になったりもする。いわば不定形な武具みたいなものかな。」

海人が青い炎を意のままに操っている。

「これができればある程度のことはできると思うんだ。時間はかかるけどみんなならきつとできるよ！」

「よっしゃ俺が最初にやってやるぜ！」

張り切った彪牙は、見よう見まねで唱えた。

するとひよろひよろとした炎があらわれ、ポン・・と消えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

[illegible]

急にしーんとした。

すると突然生徒たちが、

[illegible]

「くくつ。さすがは彪牙だなぁ。笑わせてくれるぜ」

「ほんとにやる気あんのかよ。あははははははは」

それでもかというほどに笑われた。

本人も苦笑いを浮かべつつ笑っていた。

「大丈夫かな。ああ言ったけど……」

海人は彪牙をみて急に心配になった。

だが彼らはそんなことも気にせず、次々と蒼炎の魔法を成功させていった。

「おお／＼すげ／＼ぞこれ／＼♪」

「わあ。できたできた」

3日もしない間に一人残らず使いこなせていた。

海人も正直驚いていた。

これほど早くできるとは思ってもいなかった……。

まあ扱いの良さには多少の違いはあったが、十分だった。

「これからだ……。本当に大変なのは……」

ふと海人は呟いた……。

そして運命の日は刻一刻と迫っていた。

第6話「戦慄"魔狂領域"前編」（後書き）

人物紹介2です（・ω・）っ

三倉^{みくら}亜美…ウォーロック最年少者。甘えっばい。

崩立^{ほうりゅう} 静…ウォーロックの1人。最年長者でもある。

坂上^{さかがみ}いつき…ウォーロックの1人で「ですう」が口癖。策略家。

築嶋^{つきしま} 蓮…ウォーロックの1人。希少なネクロマンサークラスでもある。

マター（マレアリーフ「タイト」ロディアス）…刻死天使王の次女。今は監禁されている。

ラズィ（ラズィール「カルラ」ロディアス）…刻死天使王の長女。現在の刻死天使最高指揮官。マターを監禁している。

また新たなキャラクターが登場するかも…。
随時更新しますww

第7話「戦慄"・魔狂領域"・前夜編」（前書き）

最近ずっとサボっていたので、久しぶりに書きました^^

何度も見てくださいっている方も初めての方も、読んでいただけると嬉しいです・・）ノ+・*∴∴+∴∴;

第7話「戦慄・魔狂領域・前夜編」

暗雲渦巻く夜。

一人の男がBAR「闇夜の集い」へと足を運んだ。

この時間帯には、仕事帰りのサラリーマンがよく訪れている。

「よう、今日も来てやったぜ。」

「ふふ、、相変わらず暇なのね、何にする？」

「ああ・・・いつものでいいさ」

いつものやりとり。

大柄な男性と、妖艶な大人の色気を放つ女性。

どこことなく他人とは違う、いわば個性的な雰囲気をもつ2人だ。

男は、一般人が飲めばたちまちつぶれるアルコール度96%という酒「スピタリス」を飲みながらこう切り出した。

「なああんだ。なんで伴侶も作らずこんなしけた店開いてんだ？
そろそろ探さないと行き遅れるぜ。だろ？w」

男は隣で飲んでいた男の背中をバンバン叩きながら笑っていた。
その男は苦笑いをしながら妙な人に絡まれたなと苦笑いをしていた。

「はは、失礼だね。これでもまだ10年は耐えられるさ。」

「へっ。さすがは長年生きてる人の言葉だ。10年でも20年でも
問題ないんじゃないのか？w」

「あんだ、、、、ひっぱたくよ、、、、」

すると男はじゃあ帰るわ、と颯爽とBARを後にした。

「伴侶、、、か。今となつては、もう。何もかもを捨て、得ることを拒んだ私の運命にそんなものは存在しないわ。」

独り言でそういうと、きりつと気持ちを入れ替え、カウンターにたらずむ客に注文された酒を出した。

夜が明けた。すがすがしい風、さんさんと降り注ぐ陽、小鳥たちのさえずり。

何かを決意したかのように、海人は窓から空を見上げ、背伸びをした。

隣りの部屋ではまだ雪奈が気持ちよさそうに眠っている。

「まったく、、、緊張感がないやつだな、、、いつ神界から魔の眷属が来るか分からないってのに、、、」

いつものように朝ごはんを作り、雪奈を起こす。

眠い目をごしごし擦りながら階段を降り、欠伸をしながらリビングに入り、朝ごはんが用意されているダイニングテーブルに着く。

「おはよう海人。今日も授業あるの?」

「俺の? ああ、、、非常時に備えて毎日するんだよ。じゃないと

いきなり襲われたら焦るだろ？」

納得したかのように、うんうんとうなずくと、卵焼きを口に運んだ。

「ちよつと考えたんだけど、、、学園長ってさ、どうしていなくなっただんだ？」

学園を捨てたのかな？だとしてもどうしてだろう、、、」

うーん、、、とその場で考え込むと、みそ汁を飲み終えた雪奈がこう言った。

「私も気になってたの。学園長がいなくて今あの学園は何のために存在するのか分からないし。」

先生が言うには学園のどの文献にもそのことは書かれていないって。」

「俺もいろいろ調べたんだが、出てきたのはこの一文だけ。」

同志、魔をもって魔を制し、久遠の地へと、いざ向かわん

ってね。」

「魔って言うのは魔法のことだとして、久遠の地って、、、どこだろう？」

「久遠の地、、、エンドグラス？神界？曖昧すぎてわかんないな」

「どれにしても、この世界ではなさそうね、この世界には魔法にまつわる地はほとんどないから。」

「この話はいいか、いずれわかるさ」

朝食を食べ終えた2人は、家を後にし、学園へと向かった。

新緑に囲まれた学園は今日もにぎやかだ。

中庭では、精霊や使い魔たちが仲良く話し合っていたり、調合に失敗したウィザードが真っ黒になっていたり、ウォーロックの面々が海人様を奉る会の布教活動をしていたり、いつものように賑やかである。

この学園は日々自由授業で、カリキュラムや休みの日は決まっていない。

別に進学や就職を目指しているわけではないので、登校だけしていれば何の問題もないのだが。

特別授業を始めて一週間。

そろそろ神界から何かしらの動きがあっても不思議ではない。

「じゃ、今日はこれまで。」

海人は授業を終えると、ふと窓の外を見た。

怪しい霧が立ち込めている。

その霧はじわじわと学園を覆った。

「この季節に霧？おかしいな。」

「いやこれは、、、魔力によって生まれた霧だ。何者かが霧を生させたんだ。」

「何者かって、、、それって、、、」

一人の生徒がそういうと、学園の危機管理システムが作動し、警報が鳴った。

「学園内にいる生徒の皆さん！！上空の歪みより多数の影を確認！
！警戒してください！！」

「ちっ！！もう来やがったか。」

「今までの授業の成果を見せてやるぜ！！覚悟しろよモンスター！
」

生徒全員が身構えると、すうっと霧が晴れていった。

「あ、、あれ？霧が、、晴れていくぞ？」

今さっきまで学園を覆っていた濃い霧は跡形もなく消えさっていった。

すると学園の庭に、10数人の人影があつた。

背には純白の翼を有し、こちらのほうを見ている。

「あ、あれは！！天命天使じゃないか！どうして彼らが！？」

全生徒が天命天使たちのいる庭へと集まった。

「久しぶりだね海人。おっと、、再開を喜んでいる場合ではないんだ。」

今神界はとんでもないことになっている。」

「とんでもないことって、、まだ戦争は終わってないのか？マターは確かに倒したはず、、」

「それが、、マターはまだ生きている、ただ、、刻死天使側の牢屋の中に幽閉されているが、、」

「はあ？どういうことだよ！！何でマターが？」

混乱する海人にいま神界で起こっていることすべてを伝えた。

「、、すると、、マターは親に踊らされてたつてわけか、、んで今はラズイっていうやつが仕切っている、、と」

「そういうことだ。それでそのラズイがいまこの人間界に攻めようとしている。」

残り時間はそう長くないだろう。攻められれば何が起こるか分からない。

我々も共に戦おう。同志ラファエルよ。」

「ああ、、、、この人間界をやつらに滅ばされてたまるかよ。必ず守るんだ。この世界を――！」

一斉に皆がお~~~~と叫び、学園にこだました。

まるで学園祭前夜のように皆が程良い興奮に包まれていた。

「今まで得ることを拒んできた、、いつまでこうしていられるのかしら、、、、」

定められた運命から必死に逃れようともがいても仕方ないというのに。

、
いっそのこと拒んで苦しむのなら、拒まずに苦しみたい、、、、

変わるために、、、、、、苦しみたい、、、、、、」

第8話「戦慄"・魔狂領域"・襲撃編」（前書き）

次回でこの戦慄の回は終わる予定です。

ご愛読してくださっている方、少し読んでみた方。

これからも読んでいただけると嬉しいです^^

第8話「戦慄"・魔狂領域"・襲撃編」

それはくだらないことだった。

今になっては後悔しか残っていない。

私が学園を捨てたのは、学園長という重責に押しつぶされそうになったわけでも、煩わしくなったわけでもない。

ただ学園というものがたまらなく恐ろしく見えたのだ。
人を逸脱した力。

それを生み出す学園。

その頂点に立つのは私。

他人のは決して理解できない私だけの恐怖。

恐怖というのは決して、死や目先の恐ろしさのみではない。
私が恐れたのは他でもない。自分の持つ力だ。

天使に並ぶ魔力を持つと言われた学園長という席。

これほどの力を得て、自分が自分でいられるだろうか。
いや、少なくとも私には無理だった。

だから学園を捨てたのだ。

だが、、、

学園を捨てたところで、私の恐怖が消えることはなかった。
何も変わらない。

ただ学園に残してきた生徒に罪悪感を感じた。
学園という足枷は外れることはない。

それならば、、、

<学園・中央広場>

「もう時間はない。そうこうしているうちにすぐラズィの尖兵はやつてくる。」

「大丈夫、覚悟はできています。」

セミの鳴き声が学園に響き渡る。

セミの声しか聞こえない。

生徒は皆、しんと静まり返り、精神を集中している。

「緊張するな、、、、何が来るか分からないから余計にな、

」

「みんなが一致団結すれば大丈夫、、、信じてる」

急に大気がバチツと音をたてて歪んだ。

時空の歪みだろうか、、、

生徒と天使たちを取り囲むようにして、歪みができる。

「来たか!!! 振り返ちにしてやるぜ!!!」

「この日のために修行したんだ。一匹残らず消し炭にしてやらあ!!」

歪みの中から、数体の異形の怪物が現れた。

「マンティコアか？これは、、、何つー強力なやつを、、、」

合成生物マンティコア

ただ普通とは違った、デッドによって生み出されたものだ。体から光子を打ち出し、相手に魔重力をかける。

常人ならば、通常の何倍ものGがかかり、押しつぶされる。

「クオオオオアアアアアアアア！！！！」

獲物を見据えたようにそれぞれのマンティコアは睨みつける。だが皆は一歩も引かない。

静かに攻撃態勢をとり、一斉にマンティコアに仕掛ける。

生徒は自分たちより山のようににはるかに大きい怪物に次々と襲いかかった。

蒼い炎で剣や鎌を創造し、マンティコアの肉を切り裂く。

「うおおおおおおおおおお！！でかぶっっ！！」

一度に30、40の相手に攻撃され、ひるみつつも、マンティコアは体から光子を放った。

「くううああ、、、っ、つぶれるぞこれ、、、」

「耐えろ！！これくらい、、、どうって、こと、ない！！！！」

明らかに動きが鈍くなった生徒めがけ、前足で薙ぎ払った。

一気に数名の生徒が100mほど吹き飛び、起き上がらない。目視できるだけで6体。

これだけのマンティコアを片づけるなど並大抵ではできない。

1体で城を破壊することもできる。

「あまり時間がない！！イクセン！！アルヴェイン！！彼らの援護に回ってくれ！こいつは俺一人でやる！」

海人はひとりでマンティコアと対峙した。

傷ついてはいるものの弱っている様子はない。

「くっ、、この前のキメラは様子見か、、格が違う、、」

マンティコアは、尻尾や前足を高速でなぎ払って仕掛けてくる。何度も吹き飛ばされ、地面にたたきつけられる。

「クオオオアアアア！！！！」

マンティコアが光子を発しようとした瞬間、海人は仕掛けた。

「沈黙の呪縛！！かの者に永久の裁きを！！」

マンティコアの周りに膜が発生し、たちまち包み込んでいった。

「ふう、、これで魔重力はかからないだろう、、これまで散々叩きつけられた礼をさせてもらうぜ！！」

背負っていた命晶剣ラヴァストームを構え、マンティコアに斬りかかった。

尾を切り落としもがき苦しむマンティコアの首めがけて一閃。

巨体は音をたてて崩れた。

「はぁ、、、、はぁ、、、、これはさすがに、、、、きついかも、

、、、、はっ!？」

海人に体が影に覆われ、何事かと振り返った。

疲れ切った海人の背面に先ほど倒れたマンティコアが立っていた。尾は切れてなくなっているし、首もない。だが立っている。

「なっ!？こいつ、、、、やばい!！」

そう思ったときは手遅れ。マンティコアの前足によって吹き飛ばされ、学園の壁に激突した。

学園には傷一つないが、海人の骨はいくつか折れただろう。

「ぐっ、、、、はっ、、、、はぁ、、、、はぁ、、、、治療能力を使う暇も体力もない、、

何より、、、、首を切っても死なないなんて、、、、なかなかやるじゃないか、、、、」

よろよろと立ちあがり、痛みをこらえ、構えた。

「俺はお前らときにはやられないよ、、、、なにより先代が許しちゃくれないからね、、、、ふふ、、、、」

体中から血が流れているが、少しにやりと笑ってみせた。

「クオオオアアアアアアア!!!!!」

「ふっ、、、、みんなが頑張ってるのに俺一人倒れられない、、、、さぁこいよ!!!!!!次こそ立てなくしてやるさ!!!!!!先代ラファエルに誓って!!!!!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1314c/>

追憶のツバサ Zodiac blessing

2010年10月13日19時33分発行